

開館40周年記念号

THE GALLERY

もくじ ■ごあいさつ | 開館40周年を迎えて

■特集1 | 開館40周年に寄せて 寄稿:佐々木吉晴(宇都宮美術館・やないづ町立斎藤清美術館長/前いわき市立美術館館長)
「本物」の芸術作品を体験できるよろこび…開館40周年記念 秘密の花園—いわき市立美術館所蔵品展に寄せて
寄稿:布施英利(美術批評家・東京藝術大学教授)

■特集2 | 開館40周年記念 秘密の花園—いわき市立美術館所蔵品展

■企画展 | フィンランドのライフスタイル—暮らしを豊かにするデザイン ■常設展示室から

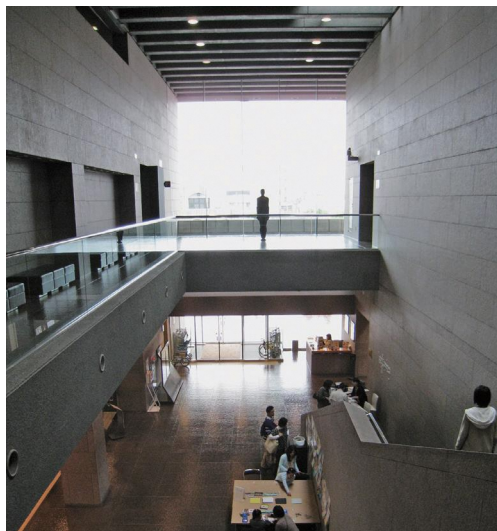
■学芸員ノート | 「パネル組み」とは……? ■今後の展覧会



今年、いわき市立美術館は開館40周年を迎えます。これに際し、『THE GALLERY』(77号)では、紙面を拡大し、当館と関わりの深い方々からの寄稿及び、4月から開催するコレクション展「開館40周年記念 秘密の花園」についてご紹介します。

ごあいさつ | 開館40周年を迎えて

いわき市立美術館は昭和59(1984)年4月28日に開館し、この4月、開館40周年を迎えます。その誕生には、1976年に設立された市内の美術家や美術愛好家らによる美術振興推進団体「いわき市民ギャラリー」が、大きな役割を果たしました。彼らは美術館がつくられることを目標にヘンリー・ムーア展やロダン展などの展覧会事業のほか、実技セミナーの開催など、建設の機運を高める運動を展開し、また、メンバーは美術館建設基本構想委員会や、具体的な在り方を決める美術館建設審議会に関わりました。いわば、行政の長によるトップダウンではなく、市民からのボトムアップでできた美術館といえます。1970年代以降、全国に美術館建設ブームが起きましたが、まだ県立の美術館が出そう前に、県庁所在地でもなく、また、観光地でもない地方都市に、現代美術の収集を特色とした市立の美術館が、延床面積4000㎡以上の規模で設立されたことは、美術関係者の間で驚きをもって注目されました。すでに鬼籍に入られた方も多いですが、美術館をつくるために奔走し、莫大なエネルギーを注いだ市民ギャラリーのメンバーや多くの関係者の方に、改めて敬意を表するとともに感謝したいと思います。

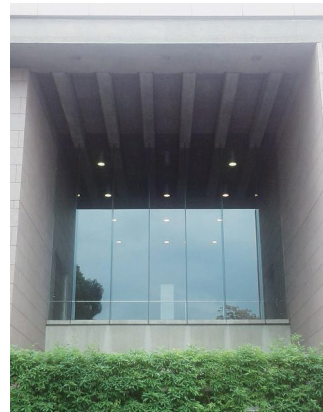


世界へのアプローチ展会場風景

美術館が計画されたのは、アメリカで『ジャパン・アズ・ナンバーワン』が出版されるなど、日本経済が高度成長を続けていた時代でしたが、この40年を振り返ると、バブル経済の崩壊、リーマン・ショック、東日本大震災と東電の原発事故、新型コロナウイルスによるパンデミックなど、私たちの生活に大きな影響を及ぼす出来事がた

びたび起こりました。そうした時代や環境の変化にもかかわらず、これまで作品収集・保存、展覧会、教育普及事業など美術館活動を継続的に展開できたことには、市民をはじめとする多くの方の支えがあったからだと感謝しております。

開館から40年が経過し、建物・設備の老朽化や収蔵庫きようの狭あいか隘化が進んでいることから、増築の検討も含め必要な改修等を実施し、さらに約40年間この建物で活動できるよう、長寿命化を図る計画で、近年、屋上防水や屋外埋設管の改修、空調機器の更新など大規模な工事を少しずつ進めています。この先の40年間に私たちが暮らす環境がどのように変わっていくのかについては、なかなか想像しづらいものがあります。いわき市の人口は現在約32万人ですが、2040年には約25万人、2060年には約17万人になるという推計があります。経験したことのない急激な人口減社会で、美術館として生き残っていくためには、これまで以上に市外からの利用者を増やすとともに、より多くの市民の支持が必要に思われます。この大きな課題に対しては、遠くても行きたいと思われるような、より魅力的な美術館となるよう、クオリティを高めていく努力を続けていきたいと思いますが、市内外の利用者の方のご意見等も参考にしたいと考えておりますので、折に触れてアンケートなどでご意見を寄せてくださいますようお願い申し上げます。
(館長 杉浦友治)



駐車場から美術館を見上げる

いわき市立美術館がまもなく開館40年を迎える。館を離れて既に3年近くになるが、準備室時代から足掛け40年を当館とともに過ごしてきたわたしにとっても感慨ひとしおである。

1984年4月、およそ4年の準備期間を経て開館したいわき市立美術館には、大きく2つの点で、それまでの公立美術館にはないユニークな特徴があった。

ひとつは、文字通り市民運動によって生まれたこと。とりわけその中核となったのが、さまざまな分野の人材で構成された市民の任意団体「いわき市民ギャラリー」である。文化センターの展示場を借りて開催するさまざまな展覧会、実技講習、座談会や講演会——市民ギャラリー主催で、まるで小さな美術館のように次々に開催される幅広い活動が市民の世論を喚起し、ついにはこうした文化芸術活動の持続のための美術館建設に向けて、政治行政を動かすまでになったのである。

もうひとつは、他の公立美術館に先駆けて同時代性をもつ美術、いわゆる現代美術を収集の柱にしたこと。いち早くこの方針を打ち立てたことにより、イヴ・クラインやウォーホルなど戦後の重要な美術家たちの優作を、市場をはるかに下回る価格で収集することができた。ただし、あまりに先鋭的な方針と作品だったために——あるいはわたしたちが未熟で、説明が十分ではなかったのかもしれない——内外からのかなり強い反発があったのも事実である。そうした拒否反応が概ね沈静化し、肯定的な意見が趨勢を占めるようになったのは、ようやく開館後4～5年経ってからのことである。20世紀後半の美術に関して、いわき市立美術館はベストではないにしても、国内有数のかなり良質なコレクションを収集することができた。しかし21世紀についてはほとんど進んでいない。国内の他館同様、収蔵庫スペースやバブル崩壊後の厳しい予算状況などが障壁になって、近年は購入がストップしているからである。わたしの代で復活できなかったのは残念であるが、収集(購入)の復活と収蔵庫や展示場の増床は、次の10年に向けての優先的な課題であろう。老朽化してきている建物の全面的なりリニューアルも含めて、再び市民とともに「熱く」議論していただけたらと願っている。

近代型の公立美術館としては極めて稀であるが、市民美術展覧会を開催しているのもいわき市立美術館の大きな特徴である。これは出発点が市民運動であり、市民とともに歩むというこの美術館の最も重要なアイデンティティに由来している。ちなみに、同展絵画の部は高さ制限が3.5mになっているが、ここまでのサイズの受容は地方では類例を見ない。

収集、展覧会、普及活動、東日本大震災……40年の間にさまざまな交渉と事業があり、難しい対応を迫られる重大事案もあった。開館2年目に初代の館長が退任し、指導者不在の中で数多くの失敗があり、少しの成功があった。多くのボランティアの助けを借りて(言い換えればまさに市民と一体になって)ようやく実現にこぎつけた蔡國強展、イヴ・クラインやフンデルトワッサー、宮島達男、川島清など内外の現代美術家の個展、トルコ(アナトリア)、古代エジプト、シルクロードなどの文明を主題とする展覧会、マンガ、絵本、コンピュータを用いるインタラクティブな美術などさまざまな分野をとりあげる展覧会、ワークショップと連動して子どもたちとつくりあげる展覧会やイベントなど、垣根を超えるような幅の広い取り組みもおこなってきた。それらすべてがこの美術館と市民の、そしてもちろんわたし自身の血となり肉となったと思っている。

あつという間であつたようにも感じるが、それでも40年は長い。開館時を知る学芸員はもう一人もいない。社会も大きく変わり、いわき市立美術館が集めた「現代美術」の多くは今や古典になった。建物も機能も老朽化している。だから思い出に浸るのもここまで。今は次代のための変革に着手すべきときであろう。ニーチェが言っていたように、脱皮できないヘビは滅びるのである。

執筆者プロフィール

1956年宮城県塩釜市生まれ

東北大学文学部(美学西洋美術史)卒業後1980年10月いわき市立美術館準備室勤務、学芸課長、副館長を経て2012年より9年間館長

現在宇都宮美術館長、斎藤清美術館長、全国美術館会議理事

「本物」の芸術作品を体験できるよろこび

…開館40周年記念 秘密の花園 ―いわき市立美術館所蔵品展に寄せて

ふ せ ひ で と
布施英利

美術館の役割は、本物の作品に接する体験ができることにある。

美術館に入ると、壁に、時には床に、本物の美術作品が所せましと展示されている。こういう美術体験は、美術館以外ではなかなかできない。

しかし、それとは違う考えもあるかもしれない。複製技術が進んだ現代ではたとえば絵画などというものは、画集やポスターになった複製を見れば良い。あるいはネットのこの時代、パソコンの中の画像を見れば、それで十分だろう、と。しかしそのような複製と、オリジナルの本物は、全く違う。それを知ることのできるのも、美術館というものの役割である。

自分の話で恐縮だが、美術館を訪れて展覧会を見る前に、ついミュージアムショップに行ってお土産を物色してしまう、という物欲にまみれた行動をしてしまうことがある(苦笑)。海外の美術館など、せっかく行ったので何か記念の品が欲しい。有名な美術作品も多い。あの絵のポスターを買おうか、あの彫刻の小さなレプリカにしようか、とあれこれ迷う。心の中で「これにしよう」と決めて、しかしそれを持ち歩いて美術館の展示を見るのも大変なので、美術館を出るときに買うことにして、まずはそのお土産の元である、本物の作品を見る。

すると、本物の作品を前にして、さっきミュージアムショップで見たポスターを買おうという気が失せてしまう。

ポスターは、精巧な写真だし、印刷もきれいだ。しかし本物と比べると、全く別物なのだ。色味の具合も違うし、本物の絵が持っているオーラのようなものもない。頭の中で「これは本物だ」「あのポスターは複製だ」という情報が、複製を見る目を邪魔しているだけではない。たしかに複製には、本物の美術作品が持っている力が、明らかに欠けているのだ。

ただそれは、本物とほぼ同じ時間の中で比べたからであって、お土産にポスターを買って帰り、日にちが過ぎていくと、自宅の壁に貼られた複製も、それなりに美しく魅力的で、美術館で本物を見た直後のガッカリ感とは別の、美術に触れる楽

しみを自宅の日常で味わうことはできる。しかし、ともあれ美術館で本物の作品を見たときには、複製と見比べることができるので、本物の美術作品がいかに素晴らしいものであるかを実感できる。

いわき市立美術館は、地方にありながら、そういう本物の美術作品の、とくに現代アートの分野における超一流の芸術に触れることのできる充実したコレクションが集められている。

今回の展覧会「開館40周年記念 秘密の花園―いわき市立美術館所蔵品展」でも、そんな体験を堪能できること間違いなしだ。アンディ・ウォーホルの「花」、イヴ・クラインの「人体測定 ANT66」などの傑作もあるが、私のお勧めは河原温の「日付け絵画」だ。たかがカレンダーの日付の数字を描いただけの作品だが、その日付けの1日に思いを馳せると、その日に何があったかという新聞記事的な記憶だけでなく、地球が太陽に向かって一回転するという宇宙的な空間と時間を体験することもできる。これこそ、一級の芸術作品だと思う。河原温の作品がどうして魅力的なのか、展覧会期間中に、私の講演会の機会もあり、そこでたっぷりお話ししますので、よろしかったら足をお運びください。

執筆者プロフィール

1960年群馬県生まれ。東京藝術大学美術学部芸術学科卒業、同大学院美術研究科博士課程(美術解剖学専攻)修了。学術博士。その後、東京大学医学部助手(養老孟司研究室)を経て、現在は東京藝術大学美術学部教授、美術批評家。『脳の中の美術館』、『死体を探せ!』、『現代アートはすごい』など著書多数。

特集2 | 開館40周年記念 秘密の花園 — いわき市立美術館所蔵品展

当館は今年4月より、企画展「開館40周年記念 秘密の花園 — いわき市立美術館所蔵品展」を開催します。当館は1984年4月28日、市民運動をきっかけに開館し、同時代の現代美術を中核とするコレクションは約2,400点に上ります。一方で当館の収蔵作品のような現代美術の作品はたびたび「難解である」「取っつきにくい」と評されることがあります。本展では当館のコレクションのなかから約150点を8章に分けて展示し、鑑賞のなかで作品の持つ「秘密」に気づいて思いを巡らすことで、現代美術鑑賞をより身近に感じていただきたいと思います。本稿では各章より1点ずつ作品を取り上げ、「秘密の花園」のあらましを紹介します(常設展示室で展示をする第8章は「常設展示室から」で紹介します)。

第1章 秘密の花園

展示室の入り口をくぐると、木々や花々に彩られた花園が皆様を迎え入れます。アンソニー・グリーンの《パッションII》(図1)は作家の別荘の庭での日々を記録した連作の一つです。画面の中央には作家本人と妻メアリーの仲睦まじい姿が描かれており、無数の花々が夫婦の憩いの時間を見守っているようです。黄色いロープで結ばれた夏の庭で過ごす二人を取り囲む花々は、夫婦のきずなの強さをも象徴しています。



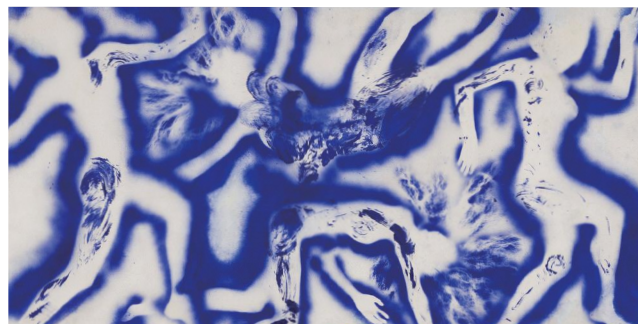
[図1] アンソニー・グリーン《パッションII》
1981年 油彩・ボード、カンヴァス
160.0×160.0cm

第2章 自然回帰

花園の奥に足を踏み入れると、作家たちが各々の手法で手掛けた豊かな自然が広がります。現代社会において多くの作家たちが文明化の裏で繰り返される環境の破壊や汚染、自然から遠ざかっていく人々の生活を批判的な目で見つめ、自然との向き合い方を模索しました。^{かわぐち たつお} 河口龍夫は東日本大震災という自然の脅威、そして福島第一原発事故というテクノロジーがもたらした災禍と向き合いながら多くの作品を残しています。《太陽と描いた無数の点》は太陽光をレンズに通して紙に照射し、焦げてできた穴を連ねて形を刻んだ連作の一つです。自然のエネルギーである太陽光によってつくられた作品からは、原子力に対する危機感さえ想起されます。

第3章 わたしたちのこと

作家たちは自分自身やその思考、自らを取り囲む社会などについて作品をとおして表明します。イヴ・クラインは作品《人体測定 ANT66》(図2)において巨大な画面に横たわった人々にスプレーをかけ、人の輪郭を写し取ります。画面にはネガのような人型だけではなく、画面上でモデルたちの身体の動きによって付けられた塗料も残っており、そこに人が存在したという痕跡が感じられます。クラインは肉体という殻を抜け出した精神の世界を信じており、青い画面に残された人型は肉体を失って精神が遊離したかのようにも見えます。



[図2] イヴ・クライン《人体測定 ANT66》
1960年 顔料、合成樹脂・カンヴァスに貼った紙
157.0×311.0cm

第4章 視覚、そして思考

目をとおして認識される「絵画」という分野において、20世紀に入ると遠近法のような視覚のイリュージョンを批判的に見つめなおす作家や、反対に新しいイリュージョンを模索する作家が登場します。ヴィクトル・ヴァザルリの《TAVAS》では円状の形態の連続と画面中央から端にかけてのグラデーションによって描かれていないはずの四角形が浮き出て見えます。彼は色彩や幾何学的なパターンの組み合わせにより画面上に錯覚を生み出す「オプ・アート」を代表する作家です。オプ・アートの作家たちは抽象表現のなかで、こちらに突出して見えるような画面や描かれた形態が動いているかのような錯視を生み出し、視覚が持つ新たな可能性を探求します。

第5章 時間を超えて

作品のなかには歴史や物語を描いたものや、ある瞬間を切り取ったもの、過去や未来を想起させるもの、そして作品そのものがつくられたプロセスを感じさせるものなど、「時間」と密接に結びついたものが多く存在します。中西夏之の《コンパクト・オブジェ(卵)》(図3)はさまざまな日用品を卵型のポリエステル樹脂で固めた作品です。制作中に自分の手の届く範囲にあったものを閉じ込めた「日記」のような作品であると中西は語っており、鑑賞者は時間を超えて作家の生きた日常を垣間見ることができます。



〔図3〕中西夏之《コンパクト・オブジェ(卵)》
1962年 ポリエステル、時計など
15.0×15.0×23.0cm

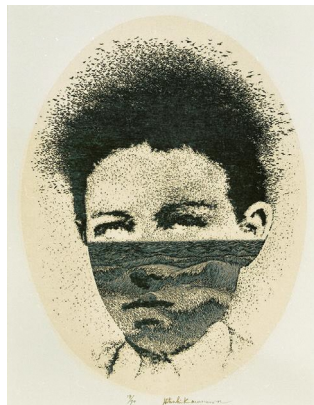
第6章 拡大する美術

戦後、全国に数多くの画廊や美術館が設立され、作品を発表する場が増えた一方、そうした画一的な空間を抜け出し、さまざまな空間にアートの場を拡大する作家も現れました。川俣^{かわまた}正^{ただし}は廃墟や建造物の周囲を廃材で囲む大規模な作品で知られています。このような作品では私たちの存在する現実と混在するような形で作品の持つ空間が拡張され、展示空間を含めて作品と見做すような手法は「インスタレーション」と呼ばれています。川俣は日本を代表するインスタレーション作家の一人として世界各地、あらゆる空間で作品を展開しています。

第7章 小さな窓から見える世界

本章では小ぶりの版のなかで思索を凝らし、作家それぞれの世界を展開した版画による作品を紹介します。柄澤^{からさわひとし}齊^しは輪切りにした堅い木材にビュランという鋭利な刃物で緻密な線を彫る「木口木版」の技法で版画を手掛けています。今回展示する〈肖像〉のシリーズ(図4)は、過去の画家や詩人たちの肖像画に彼らの作品と共鳴するような変容を加えながら描かれたモデルの真の姿に迫ります。そしてこれらを連作として見ることで柄澤自身の世界をも垣間見ることができます。

本展では作品の展示のほか、講演会や学芸員による講座などとおして「秘密の花園」の世界をより深く体験いただけます。「現代美術が分からない」という方でもお楽しみいただけますので、ぜひ足をお運びください。(学芸員 伊藤圭一郎)



〔図4〕柄澤齊
《肖像 IV アルチュール・ランボー》
1982年 木口木版・紙
19.5×14.5cm

企画展 | フィンランドのライフスタイル — 暮らしを豊かにするデザイン

2024年6月22日(土)～8月18日(日)

北欧のデザイン大国として知られるフィンランド。シンプルで機能的、かつ温かみのあるフィンランドのデザインは、時代を超えて世界中で愛されてきました。本展では、家具や陶器、ガラス、テーブルウェア、テキスタイルの逸品約750点により、フィンランド・デザインの歩みを展望します。モダンデザインの金字塔《スツール60》を始めとして名作家具を多数デザインした建築家アルヴァ・アアルト(1898-1976)や、国民の人気を誇った食器シリーズ《キルタ》のデザイナー、カイ・フランク(1911-1989)、《バード》シリーズなどポップで楽しいガラス作品を残したオイバ・トイッカ(1931-2019)、さらにはマリメッコのデザイナーとして活躍したテキスタイルデザイナー、石本藤雄(1941-)に至るまで、バラエティ豊かな作家を紹介します。



オイバ・トイッカ《アニユアルバード》1996～2022年、ヌータヤルヴィ/イッタラ、スコープ蔵、撮影：八田政玄、画像提供：世界文化社

常設展示室から

2024年前期は「ホームカミング」と題し、いわきゆかりの作家の作品や、さまざまな技法でいわきにまつわるモチーフを表現した作品を紹介します。なお、6月2日までは、企画展「開館40周年記念 秘密の花園—いわき市立美術館所蔵展」の第8章として展示します。

展示室の半分では市内作家による多様な作品や、市外の作家が残したいわきにまつわる作品を紹介します。音楽から着想を得てコラージュによる抽象画を手掛けた若松光一郎、写真による作品をとおして自身と空間との関係を探求した佐藤時啓、ランダムに選ばれた土地を研究し、実際の地表を型取って表現するマーク・ボイル。平面や立体、多種多様な表現が試みられた作品をご覧ください。

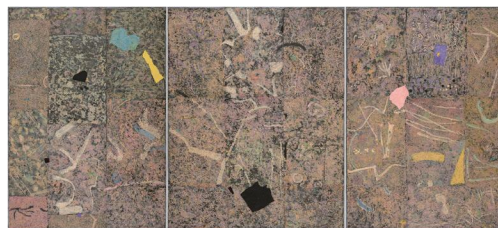
「海、街、人」と題したエリアではいわきの風景やそこに住む



佐藤忠良《常磐の大工》1956年、セメント、21.5×14.5×23.0cm

人々を表現した作品を紹介します。いわきは太平洋沿岸で東北の最南端に位置する街であり、戦前から炭鉱業で栄えました。そのため、多くの作家たちがいわきを象徴する温暖な海辺の風景を描き、炭鉱には^{さとうちゅうりょう}佐藤忠良をはじめとする県外の作家たちがスケッチ旅行に訪れ、炭鉱町やそこで働く人々を作品に残しました。

章題「ホームカミング(homecoming)」は「帰郷」そして「同窓会」を意味します。開館40周年を機に常設展示室に集った作品の共演をぜひお楽しみください。(学芸員 伊藤圭一郎)



若松光一郎《大地の歌》1985年、墨、カゼインカラー、油彩、和紙・カンヴァス、227.0×(162.0+182.0+162.0)cm

学芸員ノート | 「パネル組み」とは……？



骨組みを運び、設置・固定する



パネルを骨組みにはめ、固定する



仮設壁設置後



皆さんは「パネル組み」と聞いてどのような作業を想像するでしょうか。

学芸員の仕事は多岐にわたり、主に作品(や作家)を調査研究する、展示する、保存・管理する、紹介するといったものがあります。しかしながら学芸員の仕事、と一口に言ってもそれぞれの美術館・博物館によって異なるところが大きく、当館も例外ではありません。今回は私が当館に着任した昨年4月から約1年の間で最もおどろいた仕事、「パネル組み」について紹介したいと思います。

4月の着任早々、靴のサイズを聞かれ安全靴(スニーカーのような、爪先に板の入った頑丈な靴)を支給すると先輩学芸員に伝えられました。これをはいて館長含む学芸員全員で「パネル組み」を行うので、作業当日は汚れてもよい服を持参するように、と指示も受けました。

実はこの「パネル組み」というのは、展示室に仮設壁を設置する作業のことを指します。仮設壁は、年に6回開催される企画展毎に展示室に仮設の壁をつくり動線を設定し、壁を増設することで作品を掛けるスペースを増やすなど、重要な役割があります。これによって、空間が区切られ変化するので、展览会毎に違った雰囲気を作り出すこともできます。

ではなぜこの作業を「パネル組み」と呼ぶのでしょうか？
その由来は、開館時から当館で使われている仮設壁の構造と

設営方法にあります。設置には以下の通り大きく3つの工程があります。

1. 壁を立てる場所を決める
2. 骨組みを運び、設置・固定する
3. パネルを骨組みにはめ、固定する

とても単純に感じますが、骨組みの鉄筋とパネルは一人で運べる重さ・サイズではなく、足の上に落とすと危険なので安全靴を履き、作業は2人一組で行います。骨組み+パネル2、3枚で一つの壁を作るので、一つの展览会で10個の仮設壁を設置すると、骨組み10個、パネル20枚以上が必要になり、さらに、仮設壁を設置する前に前回の展览会で設置した仮設壁を解体する作業も含めると……骨の折れる作業となるのです。

他の美術館・博物館では、専門の業者が都度設置する館や、吊り壁式でスライドして設置する館も増えてきた中で、学芸員自らが設営するという大変な作業ではあるものの自分たちで自由自在に壁を設置できる「パネル組み」式の仮設壁は開館40周年を迎える当館の歴史を感じる設備であり、当館ならではの珍しい仕事なのではないでしょうか。

(学芸員 鈴木彩乃)

今後の主な展览会のご案内

企画展

開館40周年記念 秘密の花園—いわき市立美術館所蔵品展

4月20日(土)～6月2日(日)

フィンランドのライフスタイル—暮らしを豊かにするデザイン

6月22日(土)～8月18日(日)

常設展前期

ホームカミング

4月17日(水)～9月29日(日)

前期Ⅰ ホームカミング—海、街、人

4月17日(水)～6月2日(日)

前期Ⅱ モダン・ライフ

6月4日(火)～9月29日(日)